



Veritas No.23(2003.7.15)

目次 (敬称略)

<岡田山キャンパス移転 70 周年と図書館>

浜下 昌宏 (図書館長)

<特集 夏休みに読んで欲しい本>

三杉 圭子 (総合文化学科)

三浦 欽也 (人間科学科)

溝口 薫 (英文学科)

斎藤 言子 (音楽学科)

高島 進子 (総合文化学科)

山 祐嗣 (人間科学科)

<研究室から>

立石 浩一

<オルチン文庫にある「讚美歌集」について その六>

茂 洋

無断転載を禁ず

## <岡田山キャンパス移転 70 周年と図書館>

浜下 昌宏 図書館長 総合文化学科教授

私は今春発行された『めぐみ』92号に拙文「岡田山の建物」を寄せた。本学同窓会の方々は、今年は、神戸山本通りの諏訪山キャンパスから岡田山へとキャンパスと移転した、記念すべき70周年の年である。(諏訪山キャンパスの立体模型が図書館本館1階に常設展示されているのでご覧あれ。) むろん、古い神戸女学院を知っている方にはこの70年の歴史的経過は当然の感慨であろうが、むしろ、日々岡田山を生活と仕事の場としている現役(?)の我々の方が、岡田山キャンパスの価値をよりいっそう再認識すべきよい機会であろう。すでに先に、1997年度から2000年度までの私の館長在任中に本誌 *veritas* において「岡田山を知ろう」という連載を企画したのだが、自分の足元を嘆賞かつ説明出来ない者がいるならば反省すべし、というのが企画の狙いであった。まずは、我々自らが岡田山のデザインと自然の調和の妙を味わい感嘆すべきである。この美しさは大学キャンパスとして稀有のものである。そして第2に、我々と現在の神戸女学院が、社会的評価において、いかにこのキャンパスに依存しているかを認識すべきであろう。先の阪神淡路大地震では、ごく一部を除いては建物は被害を免れた。奇蹟的な神の御加護のおかげといってもよい。仮にこのキャンパス抜きに、我々の力のみで神戸女学院を維持し得るのか? このキャンパスのない神戸女学院は想像できるのだろうか? あらためてキャンパスの恩恵を噛みしめよう。神戸女学院という”暖簾”はこのキャンパスによって具体的に象徴されてきたように思われる。

その美しい建物群の中であって、ひときわ異彩と輝きをもつのが、図書館本館(“旧館”と呼ぶのは誤り)であろう。その2階閲覧室で先日私の専攻ゼミの授業を試してみた。(同僚諸氏もお試しあれ。) 授業への集中と緊張感が相乗される思いがした。学究的至福の時が保証される感がある。我々の研究・教育の業績も多分にこの環境の産物であろう。『神戸女学院百年史』を読み返して見ると、図書館の建築にも関係者の努力が偲ばれる。旧校舎では図書室はわずかに校舎の一角にあるだけであったのに対して、岡田山キャンパスの初代図書館長、横川四十八教授は「図書館は大学の頭脳である」と、独立した建物の必要を力説され、その結果、マサチューセッツ州の F.E. フォーブズ夫人の寄贈によって今日の図書館本館が我々に与えられたのであった。ヴォーリスによる設計図案を見ると、図書館はカテドラルのような、城の天守閣のようないくつかの構想を経て、現在のようなデザインに作られたようである。横川教授は女子図書館員の育成に努めたこと、また御自身がたいへんな勉強家で、担当科目の教育・哲学・倫理・論理学・心理学・神学等のほかに、古建築、地理、歴史、自然科学、英、独、仏語、さらにヘブライ語や中国語にも通じる方であったと学院史は伝えている。——偉大な先人の後を受けて、私の心に迷いが生れてくる。横川教授はどのような意味で「図書館は大学の頭脳である」と言ったのだろうか?

はたして今の図書館は大学の「頭脳」たりえているのだろうか？——変らぬ静謐さと荘厳さをたえている器に、我々の時代に即した新たな「頭脳」を創出することが我々の使命であろう。

### <特集 夏休みに読んで欲しい本>

三杉 圭子 総合文化学科助教授

この2月に『はじめてのジェンダー・スタディーズ』という本が出ました。これは「神戸女学院大学ジェンダー研究会」による、文字通りはじめて「ジェンダー」という言葉を耳にする人から、もっと知りたいという人まで、いろいろな分野からジェンダーの問題について考えるための本です。

ジェンダーという言葉は日本では社会的性差という説明が定着してきました。私たちはふだん女らしさ、男らしさ、という言葉をよく使っていると思いますが、そういう性別にまつわる「らしさ」って一体何だろう、という疑問について一緒に考えてみませんか。

研究会では文献研究、公表されているデータ分析だけでなく、自分たちの身近なところから目を向けて話し合いを重ね、学生の方々にも参加してもらっていろいろ考えています。その集積を、できるだけ分かりやすくいろいろな方に読んでもらおうと作った本がこれです。

学校教育、恋愛、家族、主婦、母性、仕事、性暴力、マスメディアなど、興味のあるところから手にとって読み始めてみてください。何か社会を見るときに新しい視点を発見できるかもしれません。ジェンダーって最近よく聞くけれど、はっきりは良く知らない、という人にはなるほど、と思ってもらえるかもしれません。あるいは、もうジェンダーについて既にいろいろ知っている人には、それぞれの著者が自分の専門分野から書いてみたコラムが役に立つかもしれません。

主な著者はジェンダー心理学者の森永先生をはじめ、フェミニズム批評の強者から経済学、心身医学、英米文学・文化論、コラム担当者はさらに多岐にわたってジェンダーについていろいろな窓を開けてくれています。

夏休みにちょっと女について、男について、そしてそういう分け方でいいのかな、などと考えるのはどうでしょう。もしかすると今まで気がつかなかった社会の仕組みが少しみえてくるかもしれません。

ジェンダー研究会の活動は以下のページに出ていますので、興味のある方はいつでものぞきにきて下さい。

[http://www.kobe-c.ac.jp/~morinaga/gender/team\\_genders.htm](http://www.kobe-c.ac.jp/~morinaga/gender/team_genders.htm)

●森永康子・神戸女学院大学ジェンダー研究会編 『はじめてのジェンダー・スタディーズ』（北大路書房 2002）

三浦 欽也 人間科学科助教授

根っから理系だった私のような者にはありがちなことだが、学生の頃はむさぼるように SF 小説を読んだものだった。SF 小説の良いところは、ひとことで言うと「仮想実験ができること」だ。我々が日頃常識だと思っていることが常識ではないような世界を構築し、そこで何が起るかを想像力を駆使して描いているのだ。だから優れた SF 小説は、現実を相対化することによって、普段我々が見過ごしがちな現実の諸相を浮かび上がらせる。統制された、あるいは理想化された実験環境において、さまざまな現象がより純粋な形で観測できるように、「統制された」SF 的仮想世界において、より純粋な形で現実の諸問題を考察できるのだ。

今回「夏休みに読んで欲しい本」を紹介せよとの依頼を受けて、気に入っている SF 小説でも紹介しようかとも思ったのだが、どうもマニアックに過ぎる選択になりそうなので、ここでは少しひねりを入れて、近縁分野のファンタジー小説から選びたいと思う。言うまでもなく、優れたファンタジー小説にも先の美質はあてはまる。

ファンタジーといえば、昨今は「ハリーポッター」が大流行であるが、先の観点から見れば少し物足りない。また、アニメ文化から派生した所謂ライトファンタジーも、ハリーポッター以前から一部では流行しているようだが、大抵はやはり物足りない。ここは一つ、古典を押さえておきたい。「指輪物語」は、映画のおかげで有名になったので、ここでは他の物を紹介しよう。

●U.K. ル=グイン著 清水真砂子訳 『ゲド戦記シリーズ』(岩波書店)

1. 「影との戦い」(1976) 〈原典は1968, 以下同〉
2. 「こわれた腕輪」(1976) 〈1970〉
3. 「さいはての島へ」(1977) 〈1972〉
4. 「帰還」(1993) 〈1990〉
5. 「アースシーの風」(2003) 〈2001〉

大賢人にして竜王たる偉大な魔法使いゲドの生涯と、「ことば」と「世界」と「生」と「死」の壮大な物語。もっとも、シリーズ名の「ゲド戦記」というのは、日本語版の出版時につけられたものと思われるが、「戦記」という言葉は不適切だったと思う。「戦争」に類することはほとんど起こらないし、「戦記」という言葉からイメージされるような叙事詩的な物語ではないのだから。

なお、前3巻とその後の2巻は、出版年も離れているが、内容的にも少し変化している。本来3巻までで完結していたのではないかと思われるが、作者にとって、付け足しせずにはいられなくなるような心境の変化があったのではないかと推測される。個人的には、4巻以降は、内容ともかく物語としての完成度はやや劣るような気がする。

「指輪物語」や「ゲド戦記」などの所謂ハイファンタジーとはまた異なる系譜に属する作品としては、定番ではあるけれどもエンデの代表作を挙げておく。

●M. エンデ著 佐藤真理子訳 『はてしない物語』(岩波書店 1982)

これを元に作られた映画(「ネバーエンディングストーリー」)はひどかったけれど、本の方はすばらしい。いわゆる夢物語に近い話なのだけれど、単なる夢物語では終わらない深遠さがある。同じエンデで、もう少し大人向けの、幻想的な味わいのあるものとして、次の作品もお勧めしたい。

●M. エンデ著 丘澤静也訳 『鏡のなかの鏡』(岩波書店 1985)

最後にもう一つ。想像力の極致とも言うべき作品を挙げておく。

●半村良著 『妖星伝』(講談社文庫)

1. 鬼道の巻 (1977)
2. 外道の巻 (1978)
3. 神道の巻 (1978)
4. 黄道の巻 (1979)
5. 天道の巻 (1980)
6. 人道の巻 (1981)
7. 魔道の巻 (1995)

この作品は、厳密にはファンタジーではなく、「伝奇 SF」という分野に属する。作者の半村良という人は、この「伝奇 SF」の創始者のような作家であるが、これはその代表作と言って差し支えないと思われる。おどろおどろしい作風なので、好みは分かれると思うが、現在の私の性格や思想にかなりの影響を与えた作品でもある。なお、祥伝社文庫からも同じ作品が全体を3分冊にした形で出版されているようだ。こちらの方が少し安いかもしれない。

最後はやはりマニアックな選択になってしまったが、機会があれば、パラパラと眺めて見て、面白そうなら読んでみて頂きたい。失望しないことは保証する。(私の保証では心許ないかもしれないが …)

溝口 薫 英文学科教授

●若桑みどり 『女性画家列伝』(岩波新書 1985)

芸術史の中に占める女性芸術家の割合が少ないからといって、女性は本質的に二流の芸術家にしかなれないのだ、などという人は、今日まずいない。でもこんな当たり前の認識が普及したのも実はごく最近のことだ。それは、85年に出版された本書のように、歴史のなかで抵抗し続けた女性たちの「掘り起こし」研究の成果なのだ。だが本書は、その才能や生き方を貫くことを阻む構造に対して抵抗を試みた女性画家達をただ賞賛しているのではない。あるいは世に出たとしても、そのことと芸術的達成とは別だ。女性画家たちのそれぞれの奮戦に共感しつつも、その芸術上の妥協については容赦なく切り込んでゆく活力ある文体には、対象となった画家たちと同様己の才能と生き方を貫こうとする著者自身の美術研究者としての強い情熱が窺われて楽しい。積極的に生きたいと願う若い女性には、あとがきまで是非読んでいただきたい一冊。

●若桑みどり 『お姫様とジェンダー—アニメで学ぶ男と女のジェンダー学入門』(ちくま新書 2003)

美術評論家である同上著者が世に問う最新著書は、意外にもお姫様アニメを通して学ぶジェンダー入門書である。要するにこれは、女子大でジェンダー文化を教える著者の講義の産物（ついでに言えば著者のFDの優れた成果）なのだが、性差に関する思い込みが昔話などを通じてどのように構成されるのかが大変わかり易く説明されているほか、なぜジェンダーを学ぶ必要があるのかを明確に伝えている点でもお薦めの一冊である。男女共同参画時代の新しい幸福とは要するに、両性ともに自覚的に人生を築いてゆくことであるが、著者は21世紀の男女の新しい物語もここから生まれるという。

●加賀乙彦 『死刑囚の記録』（中公新書 初版 1980）

犯罪や犯罪者、あるいは刑務所や死刑制度といった社会問題に関心にある人なら、誰でも優れた著書として推すに違いない一冊。本書はまずは拘禁という極限状況下におかれた囚人が陥る心理的状况についての克明な記録であるが、同時に死刑制度の残虐性を訴える書でもある。死刑という制度が実際に囚人をどのように扱うものであるかを彼らの心の内側に即して検証すれば、死刑とは果たして罪を償うという目的に真に適う制度といえるのかどうか極めて疑問になってくる。

ところで、本書は、もっと別な問い、例えば人間とは何か、いかに生きるべきなのか、など人間や生、その営為について深く考えさせてくれる書物でもある。圧巻は、著者がこの記録の最終章において紹介している二人の死刑囚の記録だ。彼らはともに深いキリスト教信仰を持つに至り、突然訪れた刑死の直前まで、己の心の闇を見つめ、光の希望を、文筆あるいは短歌に託し表現し続けた人たちである。おそらくは多産であることで極限状況に耐えたともいえるだろう。だが、驚くべきは遺作などに窺える彼らの到達した心境である。その清澄さゆえに、彼らの残した言葉は、逆に塀の外にいる私たちの生の意味を、あるいはその営為を問い直す鏡となる。前者の囚人の信仰については、同じ著者が『ある死刑囚との対話』（弘文堂、1990年）においてさらに詳細に伝えているので、そちらも是非お薦めしたい。生の意味を、あるいは信仰や文学の意味を再考する機会となるかもしれない。

斎藤 言子 音楽学科教授

文字中毒と言われる、ジャンル問わずの乱読派の私ですが、ちょっと毛色の違う本、是非、読んでみて下さい。

●マイヤ・プリセツカヤ著 山下健二訳 『闘う白鳥』（文藝春秋）

世紀の偉大な現役プリマバレリーナ、マイヤ・プリセツカヤ（ロシア人）の自伝。彼女の「瀬

死の白鳥」はあまりにも有名です。ソ連からロシアへの激動の時代、政変の中で翻弄されながらも、たくましく、毅然として自分自身のバレエを芸術として確立してゆく姿。自由な国で生活する私達には想像に絶するソ連時代の壮絶な内容にショックを受けながらも真の芸術は不滅だと感動し、そしてゆるぎない信念をもってどんな過酷な状況にも屈しなかったマイヤの生き方の中に、自分の人生の大切なものが見えてくる素晴らしい本です。

●マリア・ディ・ステファノ著 井内美香訳 『わが敵 マリア・カラス』（新書館）

20 世紀の最大のプリマドンナ、マリア・カラス（オペラ歌手）の相手役だったディ・ステファノ（世紀の大テノール）の【妻】が書いた、とても興味深い本です。華やかなプリマドンナ、カラスの知られざる側面が浮き彫りにされ、又、大テノールの妻としての輝かしい立場にいる著者の、芸術家マリアに対する尊敬と横暴さに対する憎悪、そして、夫と公私を共にするマリアへの嫉妬など、様々な感情にゆれる著者の女としての切なさや妻という立場にいる事の強さ、縁あった人との関わりが、こんなにも、愛しく悲しいものなのかと考えさせられます。

●正木晃 『魔法の猫と魔女の秘密－魔女の宅急便にのせて』（春秋社）

これは、音楽学部の中村健先生もご推薦の本です。厳しい状況の現実世界の中で、ハリー・ポッターを筆頭に魔法の世界が大流行です。漫画チックな題名の割には、魔女の歴史、魔法と科学、西と東の魔女の比較など、しっかりした考察に基づいた話の中にアニメの魔女達が飛び回ります。何か疲れているあなた、ちょっと、別の世界で遊んでみませんか？心も体も、かる～く飛ばたりして・・・。

●浜田寿美男 『自白の心理学』（岩波新書）

世の中では、種々様々複雑な犯罪が起きています。未解決のものも多くあります。しかし、解決済みとされている事件の中でも、本当の意味で解決されていないものがたくさんあります。つまり、冤罪事件です。被疑者と呼ばれる無実の人が、身に覚えのない犯罪を自白してしまうというありえないはずの事が現実として起きてしまう心理的なメカニズムの検証の話です。他人事では済まされない恐怖です。内容の重い本ですので、時間の取れる夏休みにじっくり読んで欲しい一冊です。

高島 進子 総合文化学科教授

この国が、明治維新、敗戦に続いて世界へさらに開かれていく地球化の時代、それは、同時に、これまでもそうであったように、他方で、苔むす復古への回帰のときでもあるよう。21 世紀の「情報市場化」社会の中で、透明に近いまでに現実感の希薄化されたわたくしたちに、半ば



脅迫観念のように喧伝される「自分探し」、そのゆく末はいずこ？ 時代の愚情、劣情にファッショネイトされるのではなく、過去と未来の交錯するいま・ここへのまなざしを少しでも確かなものにし、自分自身をみつめたい。そんな思いから次の三書。

- 辺見庸×高橋哲哉 『新私たちはどのような時代にいきているのかー1999から2003へ』(岩波書店 2002)
- キャロル・グラック他 『日本はどこへ行くのか』(日本の歴史 25 講談社 2003)
- 菅野仁 『ジメル・つながりの哲学』(NHK ブックス 日本放送出版協会 2003)

暑い夏休み、楽しく読書、と先週末近くのキノクニヤで手に入れた三冊。けれど、どれも胸にこたえすぎるような本たち、だったかな～。

- J. D. サリンジャー著 村上春樹訳 『キャッチャー・イン・ザ・ライ』(白水社 2003)
- 池田晶子 『14歳からの哲学』(トランスビュー 2003)
- 清水勲 『古きよきサザエさんの世界』(いそっぷ社 2002)

山 祐嗣 人間科学科教授

読書の最も大きな楽しみは、そこに描かれている世界のイメージを、文字を通して推論しながら構築していくことだろう。最初は、あれこれとさまざまな可能性を膨らませてくれて、そして説得力をもって特定のイメージや結末に収斂させてくれる著者は、生涯の友にも代えがたいものである。

司馬遼太郎はそんな作家の一人である。「坂の上の雲」(文春文庫全八巻)は、日本が先進国に追いつこうと必死になっていた明治維新から日露戦争の時代を生きた、松山出身の三人の男を描いた作品である。コサック騎兵を相手に一步もひけをとらなかった秋山好古、その弟で日本海海戦の参謀秋山真之、近代の俳句のパイオニアである正岡子規の人間臭さと「坂の上の雲」を目指す真摯さが、たいへん魅力的に読者に伝わってくる。現代では価値観が多様化して、「坂の上の雲」を目標として追い続けることに疑問を感じる人も多いかもしれないが、司馬の描く人間像は、現代にも普遍性をもって清々しさを感じさせてくれると思う。

わたしが推薦するもう一冊は、ジャレッド・ダイヤモンドの「銃・病原菌・鉄」(草思社上下巻)である。この書は、あるニューギニア人の、「なぜ欧米ではたくさんものがあるのにニューギニアにはそれが無いのか」という素朴な疑問から始まっている。すなわち、文明の発展が各大陸において、たいへん不均衡であるという歴史的結果を、生物地理学、進化生物学、文化人類学からの知見を用いながら解き明かしていくというスタイルをとっている。さまざまな想像を喚

起させてくれ、かつ説得力があって、知的興奮を呼び起こす本だと思う。ダイヤモンド自身は進化生物学者で、同じ草思社から出版されている「セックスはなぜ楽しいか」では、性淘汰のメカニズムから、ヒトの性の特殊さを解き明かしている。

- 司馬遼太郎 『坂の上の雲 全八巻』(文春文庫)
- ジャレッド・ダイヤモンド 『銃・病原菌・鉄 上下』(草思社)
- ジャレッド・ダイヤモンド 『セックスはなぜ楽しいか』(草思社)

## <研究室から>

制約の中の変容

立石 浩一 英文学科教授

生まれてからこのかた、常に何かを数えたり覚えたりしていた。ある時は駅の名前であったり、ある時はテレビのベストテン番組(最初は、「ゴールデン歌謡速報」(フジ系)だった)に登場する歌のランキングを全部メモったり(おかげで、今でもカラオケで歌う歌には不自由はしない)、そしてまたある時は、保育社の図鑑に載っている無脊椎動物の綱・目・科・属・種の分類基準を本に文字通り穴が空くほど読み、イソギンチャク類の種類の見分け方なら右に出るものはいなかったりもした。そういう人間の常として、普段は人と一切しゃべらない。必要が無いからだ。そのかわり、上記のような私の心にひっかかったものについて、誰かがいい加減な発言をしているのを聞くと、例えそれがピンキーとキラーズのメンバーの数についてであっても、そいつを叩きのめしにかかる、役に立たないことこの上ないばかりか、端に居られると迷惑な人間であった。ただし、それ自体については、今でも反省も後悔もしていない(だから、今でもそういう人間である)。

そういう暮らしの中で、未だにしつこく私を魅了する分野がいくつかある。今私の生業となっている言語、折り紙、漫画、ゲーム(いわゆるテレビゲーム的なものからカードゲームまで)、流行歌(今でも売れているものは全部チェックする、で、覚える)、時刻表である。後の3つは割愛する(書き出すと本1冊くらいの分量になる)。言語に対する最初の興味は、中学時代の英語の教科書が発端だ。当時の教科書にあった、各章の文法項目をチャート式で示してある部分に魅せられた。何となくパズル的で、でも、闇雲にチャートの囲み文字の部分に単語を置き換えて入れても、正しい英文にはならない、そのことが、面白くてしょうがなかった。およそ英語教育というものの目的とは懸け離れた所で言語に興味を持ち、相変わらず学校では誰にも一言も発しない

子供であったにも拘らず、英語の点数は学年でトップになった。言語に関する第二のショックは、大学に入ってから、ふと気まぐれで入った手話サークル。今まで日本語をただ手話の記号に置き換えているとだけ思っていた手話が、(栃木県を中心に当時行われていた一部の手話教育におけるものを除いて)実は日本語とは別個の文法を持っている別の言語であるということを知り、習っているうちに次第に理解した。ここから、言語の変容に興味を持った。手話サークルの部長がたまたま言語学の教授であったので、社会言語学や、方言学にのめりこんだ。そして、第三のショックは、最終的に私の指導教員となる、当時国際基督教大学教授の村木正武先生の形式意味論の授業であった。これだけ表面的な変容が激しい言語において、意味の世界と言うのが、論理的定式化により、美しく記述できることの幻想に陥った。未だにこの幻想から覚めてはいないのだが、その延長線上に、私のチョムスキー理論に対する興味、最適性理論に対する興味は、ある。ある制約を定めてしまうことにより、どれだけの変容が記述できるのか、というところが、私にとっての理論言語学なのであろう。であるから、未だに、理論の文言をどう解釈するのか・規定するのかに興味があって、実際の文法現象の記述への興味は、その次である。

次に、折紙である。折り紙に対する私の興味は、子供時代に接した、内山道弘「新案特許そうさくおりがみ」(文海堂、1963)からであった、4歳くらいの時に、母親がこの本を買い与えた。折り紙というと、折鶴くらいしか知らなかったのが、この本に載っている「カイコの蝶」、「福助」、「金太郎(マサカリ付き)」、「亀に乗った浦島太郎(腰みのと玉手箱と釣竿付き)」などに、ノックアウトを食らった。本がぼろぼろになるまで折った。この本の終わりに、展開図のみで、「この展開図からは～が折れます」というのが沢山あったのだが、それが1つも折れなくて悔しかった。悔しいままで、引越しなどで本自体が紛失し、トラウマになっていた。それからしばらくして、高校時代に、笠原邦彦氏が江戸時代の連鶴の手引書を紹介している書籍を見つけた。くちばしや、翼でつながった鶴の山が、机の上に積まれた。大学時代に、河合豊彰という折り紙の作家が居ることを知った。彼の本が載っているシリーズ(「おりがみ」(保育社)など)を買いあさった。特に、正方形1枚から折る般若の面に、とてつもないスケールを感じた。とどめは、留学から帰ってきてから、家の近くの本屋でふと見つけた、前川淳「ビバ！おりがみ」(サンリオ)だった。子供の頃トラウマになっていた、展開図折り、しかも正方形一枚を切らずに(「不切正方形一枚折り」、という)、背中の子ちゃんと割れた足の6本付いたカブトムシ、耳や舌や尻尾や指まで折り出した悪魔、などを作り上げる。自分が子供の頃に感じたトラウマをトラウマにせず実践に移した人が居たことに、感動した(前川氏は私と同年代であり、今では大変懇意にいただいている)。河合豊彰の面に感じていた、何か尋常ではないものの正体が、明らかになった。その後、前川氏などが所属している、折り紙研究団体の存在(現在の日本折紙学会)を知り、即刻入会した。そこには、折鶴の用紙の幾何学的特徴についての論文で博士号をとった人、1枚の紙からとげが何本も出たウニを折る人、折り図の記号・言語にこだわる人、などが居た。皆に共通しているのは、「紙」という限られた素材で、どれだけの変容を生み出せるのか、その背景にはどのような理論があるのか、という問題意識であった。正方形をベースにどれだけの世界が生み出せ

るのか、そう簡単に答えが出るものではないが、制約の中の変容に魅せられたまま、現在では折紙本のバイリンガル化作業に手を染めるまでになってしまった(この文章を書いている前日(6月24日)、1冊目が出版された(西川誠司「西川誠司作品集」(おりがみはうす)、近日中に後2冊出る予定である))。多分、近いうちに、折紙用語の翻訳マニュアル(特殊用語の山であり、語法も特殊である)くらいは作ることになるだろう。

漫画に対しての興味も同様である。私は、梶原一騎に興味が無い(読みはしましたが)。ジョージ秋山にも興味が無い。SF漫画にも、「はだしのゲン」にもまったく興味が無い(大友克洋もう要らない;でも魚喃キリコや南Q太は好きだ)。どちらかという、「のらくろ」の足跡になぜか立ち上がる、白い雲のような煙のような丸いアイコンに興味がある。あの種の「漫符」(竹熊健太郎と相原コージの用語(「サルでも書けるまんが教室」(小学館)))の出自は何だったのか、結局紙というメディアの持つ制約である。紙をどれだけマルチメディア化するのか、その努力の中で生まれてきたのが漫符である。手塚治虫の「おむかえでごんす」・「ヒョウタンツギ」・「アクションブリケ」などは、漫符が漫符に過ぎないことを逆手に取った、漫符の擬人化という遊びであり、それをあのような形で笑いに変えてしまった、手塚治虫の技量は大した物である(ああいうので、漫画って面白いな、と思った)。が、漫画評論とか研究というときに、こちらの側面はほとんど取り上げられない(「アトムの日」なんてどうだっていいじゃないか!)。大体が、内容批評、シンボリズム、社会的側面の分析、戯評、等が多い。それでは、文学作品でなくなぜ漫画を扱うのか明確ではない、と思う。それよりも、コマという、漫画の制約を突き破る実験をした、とり・みきの「エントロピー」(手塚治虫もそういう実験はしていたが)、漫画からストーリー性を一切排除しようとした一時の吾妻ひでお作品や、赤塚不二夫の「レッツラゴン」、現在の唐沢なをき作品、たがみよしひさ「軽井沢シンドローム」のコマ間ネームの洪水、などに、漫画の漫画たるゆえんの部分があるような気がする。漫画における「間」の表現などは、明らかに文学作品のそれとは異なっており、これらを、漫画は紙の上の表現である、ということ踏まえた上で研究するような試みは、あって欲しい、と思う(海外の漫画研究には一部その種のもの存在するが)。例えば、ストップモーションのコマが、時の経過の場合と、場面の転換の場合との、読み手の技法の違い、などであるが(おまえがやれよ、と言われそうだが)。

よくある議論だが、だから、図書館に漫画を入れるべきだ、というのには反対する。なぜなら、上記のような、漫画研究としての漫画研究をするための資料になる漫画は、多く単行本などによる出版からは漏れてしまうので、実際のところ、まともな資料になる漫画は、図書館などには入らないのだ。また、漫符などの漫画の漫画らしいところは、多く単行本化の際に削られてしまう場合があるので(手塚治虫の「ジャングル大帝」など、今出回っているのは最初の連載とは似ても似つかないものである)、入れては見たが何の資料にもならないことが多い。

とりとめも無く書き連ねたが、結局、私が興味があるのは、何かに縛られているメディア・体系が、どれだけその呪縛から逃れられるか、あるいは逃れられないのか、そこにおける理論化・体系化なのであろう(そういえば、昔、鉄道関係の研究書を買ってきて、今計画されている鉄道の路線がすべて予定通りに開通したときの仮想時刻表なんて物を、3ヶ月くらいかけて書いたことがあった)。今回は書かなかったが、最近の流行歌が、いかに昔ながらの五七調に縛られているか、などというのも、なかなか興味深い(若い人の歌ほどそうである;あ、これは言語学だ!)。そういう私の嗜好性にかなうものなら、何でも取り込んで集めていじくり回す、これからもそういう人生を歩んでいくのであろう。基本的に、邪魔立ては、許さない(おこわ)。

先日、本学図書館に、子供の頃のトラウマ本、内山道弘「新案特許そうさくおりがみ」があることを知った。世の中、何が幸いするか分からないものである。今、その本を借り出して、目の前に置いている。驚くのは、内山氏の展開図の、今の展開図折り職人たちの展開図に引けを取らない、精緻さである。今見ても新しいのだ。結局、この本を手にした時に、私の進む方向性は決まってしまったのかもしれない。今、神戸女学院において、再びこの本を手に行っていることに、運命的なものを感じざるを得ない。皆さんも、およそ、図書館をおろそかにしてはいけませんよ、どこに、皆さんの心のアンバランス・ゾーンを刺激する何かがあるか分からないのですから。

## <オルチン文庫にある「讚美歌集」について その六>

茂 洋 本学名誉教授

ここでは、大変特徴のある讚美歌集「讚美歌並楽譜」(15)(1882年・明治15年)について、説明しましょう。なぜ特徴的かといえば、全部の讚美歌に、はじめて木版ではあるのですが、五線紙による楽譜が付いたからです。その編集者は、組合教会宣教師カーティスでした。

この讚美歌集には、歌130と歌詠之文12があり、そのうち楽譜が71あります。ということは、一つの楽譜で、いくつかの讚美歌を歌うということになっています。カーティスは、この讚美歌集は、「古い元の讚美歌集」と「東京の長老派の讚美歌集」と「かなり多くの新しい讚美歌」から成り立っていると書いています。

その「古い元の讚美歌集」とは、彼が編集した前の組合教会の「さんびのうた」(13)とその前の組合教会讚美歌の「三びのうた」(11)などです。實際上「さんびのうた」(13)から五十五の讚美歌を採り、「三びのうた」(11)などから四つの讚美歌を選んでいきます。

そして「東京の長老派の讚美歌集」とは、一致教会で出版された「讚美歌 全」(24)のこ

とで、そこから二十四の讃美歌を採りました。のこりの四十七の讃美歌は、新しく選ばれたものです。

さらに「歌詠之歌」十二曲が加えられていますが、そのうち半分の六つは、やはり「さんびのうた」(13) からで、のこりの六つは新しいものです。

最後に、カーテイスは、「必要を感じてきた事柄の讃美歌」を六つ(楽譜は五曲)を加えました。「必要を感じてきた事柄」とは、結婚式、住家、子供の歌、そして愛国です。

それぞれの讃美歌は、どのように変えられていったのでしょうか。いくつかの例をあげてみましょう。とくに組合教会最初の讃美歌(06)と比べてみましょう。

最初に15-89「イエスひとにかわり」を見てみましょう。

15-89

The image shows a musical score for a hymn. At the top, it is labeled 'MOODY, G. H.'. The score consists of four staves of music. Below the music, there are four columns of Japanese lyrics, numbered 一 through 四. The lyrics are:

一 (一) イエスひとにかわり 十の十  
二 (二) イエスひとにかわり 十の十  
三 (三) イエスひとにかわり 十の十  
四 (四) イエスひとにかわり 十の十

曲は MOODY で、歌詞は、最初の06-04から随分手が加わっています。Veritas 19にある06-04の讃美歌と比べてみて下さい。15-89の歌詞は次のとおりです。

- 1 イエスひとにかは(わ)り 十字架(じゅうじか)につき  
 いたくるしめり これかみなり  
 (を(お)りかへ(え)し)  
 そのじあいをみ そのじあいをみ  
 そのじあいをみ イエスをあいす
- 2 わがつみのために イエスは死せり  
 これぞかぎりなき おんめぐみなる
- 3 そのいつくしみを ふかくあふ(お)ぎて  
 わがあしきことを くいあらためん
- 4 かみのみこころに ひびにしたがふ(う)も  
 そのいつくしみに むくいがたし

06-04と比べてみると、まず何と言っても、曲にあうように、歌詞が変わっていますし、その上かなり日本語らしくなっています。もちろん、間違いも訂正されています。06-04の二節「わがつみのために えほばしせり」という基本的な間違いは、この15-89では「わがつみのために イエスは死せり」と直っています。

一節だけ取りだしてみても、「いえすにんげんにかわり じゅうじかによりて ふかくくるしめり これかみなり」が、「イエスひとにかわり 十字架につき いたくるしめり これかみなり」と変えられています。これで、かなり歌いやすくなっています。

つぎに15-58「かみはくだり」を見てみましょう。

15-58

THOMPSON, S. M.

〇五十八

一 かみはくだり  
 エホバにうまれり  
 二 聖霊をききよ  
 三 つりかへりて  
 四 ひとはかり  
 十字架はよはせり

かみなりて  
 これかみなり  
 聖霊をきよ  
 上バにくだり  
 わがしきこと  
 つとめおぼひ  
 これかみなり

この讚美歌は、06-05からきたものです。Veritas 19をご覧になって下さい。ここでも、曲にあうように、しかもより適切な日本語に変えられています。でも内容的には、かなり道徳的ですね。

- 1 かみはくだり                    ひととなりて  
   ユダヤにうまれり            これイエスなり
  
- 2 を（お）さなきより          おやにつかへ（え）  
   孝行したまひ（い）しは      よののりなり
  
- 3 へりくだりて                    なやみをたすけ  
   を（お）しへ（え）をなせしは   わがみちなり
  
- 4 ひとにかは（わ）り          つみをあがなひ（い）  
   十字架にしにたもふ（う）これすくひ（い）そ

さらに次号につづきます。